

「はたらく」発行について

## はらから福祉会二十年の歩みと、これからの想い

はらから会が誕生して、はや32年が経ち、はらから福祉会が設立して19年になりました。法人20年目を迎えるこの機に一度立ち止まり、これからの「はらから福祉会」の在り方について確認・考慮し、その想いを一人でも多くの人に伝えるための機関誌「はたらく」を発行することとなりました。

はじめに法人名や会の名前に使用している「はらから」に込められた願いを説明いたします。「はらから(同胞)」とは、障害の有無、障害の種別、またその軽重に関わらず、人は皆、母親から生まれた同じ人間、兄弟姉妹という意味です。同じ人間として地域であたりまえに暮らしを送れるように、障害が有る人も無い人も共に補い合い、助け合おうという願いから命名致しました。

はらから福祉会は、どんなに障害

が重くとも、働くことは人間にとつて最も基本的な営みであり、かつ人間として生きていくために必要不可欠な権利であるという考え方を基本に、障害者の自立と社会参加を目指しています。その為に、障害者がその能力を十分に発揮し、働くことに意欲的に取り組むことができ、所得を得ることができるよう、最大の配慮を致します。その仕事として、食品加工を主とした作業を通して、地域社会の人たちとの繋がりを深めていきたいと考えています。

障害がある人でも、当たり前前の暮らしは保障されなければなりません。障害を理由にした不自由さや不便さ、低賃金を認められません。この考えを基に、はらから福祉会では利用者工賃月額7万円を目標に利用者・職員が一体となって活動しています。

なぜ目標工賃が7万円かという点、年金と給与を合わせて13〜15万あれば、「障害者が地域の中で生き生きと暮らすことができる」のではないかと考えたからです。この考えは、はらから会を発足した当初からの考えで、はらから福祉会の理念の基礎となるものです。その13〜15万円の根拠となるのが、宮城県内での最低生活費が約10万5000円(国の平成21年度の生活貧困線は年額112万円) 障害者年金と工賃を合わせて考えると、必要工賃額は年金1級の人では2万3千円、2級の人で4万円になります。この金額は、はらから福祉会では達成しています。次に目指すは中央値(年額224万円)ですが、その一里塚として貧困線と中央値の中間地点として利用者工賃7万円を目標にしています。

### はらから福祉会について

はらから福祉会の理念  
『はたらくことを生活の柱に』  
はらから福祉会の目的  
『どんなに障害が重くとも、地域で当たり前暮らしを実現する』  
はらから福祉会の目標  
『利用者工賃月額7万円支給』  
平成27年度 重点課題  
『「ミひとつ落ちていない事業所つくり』

5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰け)の着実な取り組みで、菌対策、異物混入対策を徹底し「はらからブランド」の質的向上を図ります。

『はらから商品のファンづくり』  
仕事を通して多くの人と結びつきた

いと願っています。それが障害者理解に繋がる確かな道だと信じるからです。そのために、皆様から信頼され、愛好される商品つくりを知恵をだし工夫いたします。

(平成27年9月現在)

蔵王すずしろ(豆腐・豆乳製造)

利用者49名、時給400〜710円

びいんず夢楽多(油揚げ・厚揚げ)

利用者45名、時給500〜600円

ふきのとう村田(合庁食堂・リサイクル)

利用者27名、時給300円

くりえいと柴田(パン・レトルト)

利用者44名、時給400〜700円

はたまき・手づくりの里(菓子製造)

利用者37名時給400〜550円

えいむ亘理(牛タン加工)

利用者36名、時給600〜650円

みお七ヶ浜(練り製品・惣菜・食堂)

利用者29名、時給400円

登米大地(あぶら麩・三角揚げ製造)

利用者32名、時給400円

地域生活支援センター

(法人本部・相談及び地域生活支援事業)

はらから福祉会の詳細はホームページで「確認ください。」

<http://www.harakara.jp>

または「はらから」で検索

連載  
未来への足跡

## その一、人はなぜ働くのか

この議論は、はらから福祉会にとって永遠のテーマであり、法人全体として、また職員一人一人が追及していかなくてはならないことです。働くことは人間にとって最も基本的な活動であり、働く意義に障害者や健常者の違いはありません。はらから福祉会の理念の「働くことを生活の柱に」や目標としている「利用者工賃7万円支給」が、なぜ必要なのかの根底となることなので、今後のはらから福祉会が確かな道を歩むためにも、職員一人一人が考慮していく必要があるのです。

## 働くことを生活の柱に

なぜ働くのかという議論は、障害が重いか軽いか、あるとかないとかに関わらず、一人の人間として生きていく上で必ず考えることではないでしょうか。障害がない方であれば自分の思いで行動(仕事)をすることは、それほど困難な事ではありませんが、障害者にとって仕事(働く)は、生活していく上で大きな位置付けになってきます。年金があるからそれで良いのではという意見も

ありますが、毎日行くところもなく、日がな一日自分の部屋で、家族や地域の人の目を気にしながら遠慮して生活している日々が想像できるでしょうか。朝に「行ってきます」と家を出て職場に向かい、夕方「ただいま」と言って家に帰る当たり前の生活が出来ないのです。当然暮らしていくための糧(収入)もないのです。障害を持った方は自分の意志や判断で行動するのが得意ではない人が多く見られます。そのため先に述べた、朝に家を出て仕事をして夕方に家に帰る生活のリズムがとても重要になるのです。はらから福祉会の理念である「働くことを生活の柱に」はこの部分が多くなっていきます。

## 働く意義について

- 一、生活の糧を得るため(生活のため)  
※はらから福祉会7万円保障はここからきています。
- 二、社会的役割分担(傍を楽にする)
- 三、自己実現を図るため(自信・意欲)

と言われています。はらから福祉会も同じ考えです。この3つのことを実現するためには市場経済の中では困難なことが多くあります。特に障害を持った人が通う施設では尚更で

す。障害が重くなればなるほど限界を働くことの困難さに結び付けてしまいうからです。しかし、その困難を一つ一つ解決していくのが「はらから」の役割だと捉えています。はらから福祉会の各施設で、すべての困難を解決できているわけではありません。はらから福祉会の現状で記載した通り、ゴールは見えつつありますがまだ道半ばです。現状多くの困難なことに直面しています。そんな時、はらからでは「迷ったら一歩前へ」をスローガンにして取り組みを前にしています。はらから共同作業所に始まり、はたまき共同作業所、蔵王すずしろそして現在ほ県内に8ヶ所の施設を作ってきました。その際に多くの人から支援を頂き、学びました。やる意義があれば思いは通じると。現状維持や一歩後退では何も変わりません。失敗や不安ことは考えず、成功するためにはどうすれば良いかの方法を考えることにしています。成功するための最大限の努力を行うのです。成功とは何か、はらから福祉会にとっては所得保障です。工賃7万円を支給出来たかどうかです。支給した金額に、職員が利用者支援をどの程度創意工夫したかが表れると考えます。

福祉はお金ではないと考えが根強く残っています。自分の立場を障害者施設に通っている利用者に置き

換えて考えてみてください。全国の利用者工賃平均の約1万2千円でどんな生活ができるでしょうか。先に述べたはたらく意義の3つの事柄など到底できるはずがありません。障害が重くなればなるほど健常者よりも負担(お金)のかかる生活をしながらはならないのです。施設に通う大半の障害者が年金1級と合わせても9万円弱、2級の方では8万円に満たない額で生活しなくてはならない状況なのです。この現状が当たり前前の生活でしょうか?このままの給与(工賃)で良いのでしょうか?答えは決してそうではないはずです。はらから福祉会は、この福祉の常識から脱却し、食品加工にこだわらずに活動の範囲と質を高め、障害者が生き生きと働ける場所を提供したいと考えています。

「はたらく」では、読者からの疑問・質問を募集しています。はらからについては勿論、障害当事者の悩み保護者・関係者の疑問・質問などありましたら、左記連絡先までお願いいたします。また、機関誌を紙面ではなくデータでお送りしたいと考えていますので同じ宛先で登録して頂ければ幸いです。

info@harakara.jp